

## ガーデナーさん、有難う！

(僕は姿勢を忘れるところでした)

僕は、かかりつけ医を稲城市・若葉台のクリニックにお願いして、一〇年近くになる。

そのクリニックのフロアには、窓際に植栽が2鉢置かれている。鉢植えは1・5メートルほどの高さの観葉植物。調べたところ、ココロバ(当て字で心葉)というようだ。

今日は診察待ちの先刻から、その鉢植えに男性が一人、長いことじっと身体をかがめて何やら取り組んでいるのが気になって、何をしているのか？彼の手元を見詰めていた。

分かりづらいので、さらに傍に廻り込む。邪魔になつてはならないので、僕の息が掛からない背後から彼の手元を覗き込むと、何と、葉っぱの一枚一枚を両手で包み込むようにしながら、優しく拭いている。一体何枚あるのか分からないが数十枚以上はあるだろう。その一枚一枚をまさに手塩に掛けるように丹念に清拭している。後ろに居る僕などを気にする様子はまったく無い。

ガーデナー？植木職人さん？何とお呼びしてよいか分からないが、とにかく維持管理を専門にしている人のようである。この職業の方々皆さん、こういう仕事ぶりなのだろうか？

とにかく彼は、ひたすら没頭して独自の境地にあるのだろう。その背中から得も言えぬ優しさが漂う。それが気になっていた。それをじーっと見ながら、いつの間にか僕は悔しがっていた。

(どういふ心境かというと・・・)

何十人に一人ぐらい、ひどく退屈なことにも興味を寄せる酔狂な閑人が居るもので、そういう輩はここでは鴨。他ならない僕の

ことだ。彼の背中が招く「その鴨！もつと近こう寄れ！それそれ！」僕は吸い寄せられるように近寄る。

すると耳元で、「旦那！よかつたら、投げ銭を！」……まさか、そう云うはず無いが、そんな風に目論んでいるのではないのか？と邪推したくもなるお金のとれる背中で、パフォーマンスを演じているように見えてしまったのだ。

悔しい気分には、ずっと昔に訳がある。

僕の現役時代も、指先に込めた仕事はかなりこなして来た自負はある。しかし先ほど来の彼の仕事ぶりはその非でない。優しさあふれる指先、背中からは深い愛情すらにじみ出ている。

対して、僕が手掛けたのは生きた植物でなく、無味乾燥の一枚の紙。その紙面に発想しアウトプットしたものに当然価値が有るわけだが、それを産み出す過程にこそ命があつたはず。ところが当時、僕はクライアアントの反応にしか関心が無く、産み出すまでの葛藤は如何であつたか心もとない。後にそれを自戒した。

それを今更のように、こんなところで思い出そうとは！先ほど来の彼の姿勢に接して、負けたような気分を味わってしまったのだ。

かつての僕が、もつと優れたプロであつたなら、暗黙の背中に凄味とか得も言えぬ雰囲気をまとっていたであろう。

いや異次元になれば、東北のゴッホさんや岡本ピカソさんなんかは爆発していた。病床六尺の子規さんに至っては悲憤慷慨を狂おしく発していただろう。さらに……

いや待てよ、何を今さら戻しようもない過去を悔やむのか？

前を向こう！今、目指すべきことがあるだろう。それを修験者のごと、一筋に追い求めるのではなかったか。

あ、診察の番だ（了）

